

論 説

海外 CBL プログラムの成果と課題

——政策実践・探究演習（海外）「ポートランド国際 CBL プログラム」を事例として——

石 原 凌 河
村 田 和 代
吉 本 圭 佑

**Achieved Results and Issues of the Overseas CBL Program
——A Case Study of the Portland CBL International Program
in the Investigating Policy Science Through Field
Research (Overseas)——**

要 旨

本稿では、龍谷大学政策学部とポートランド州立大学とが協働で開発した「ポートランド国際 CBL プログラム」の2019年度の取り組みの概略について報告するとともに、受講生によるアンケートの結果等からプログラムの成果と課題について考察した。本プログラムの成果として、日本とポートランドとの比較を通じて community-based learning (CBL) について実践的に学べた点と、受講生が積極的に英語で発信する姿勢を身につけることができた点が挙げられる。

一方で、ポートランド州立大学との学生との相互交流の機会を提供できなかったことや、ポートランド州立大学との連携がうまく図れなかったといった課題も散見された。

「ポートランド国際 CBL プログラム」をより充実したプログラムに発展させていくためにも、プログラムの精緻化が求められる。

キーワード

コミュニティー・ベースド・ラーニング、ポートランド、アクティブ・ラーニング、グローバル人材

Abstract

This paper states the efforts of the “Portland International CBL Program” in collaboration with Portland State University for the 2019 academic year, and discusses the achieved results and issues based on the results of a questionnaire survey of the students.

The outcomes of this program were that the students were able to learn about community-based learning (CBL) practically through comparisons between Japan and Portland, and that they were able to acquire an attitude of actively communicating in English. On the other hand, there were some issues such as not being able to provide opportunities for mutual exchange with students from Portland State University and not being able to collaborate well with Portland State University.

In order to develop the Portland International CBL Program, it is necessary to refine the program.

Keywords

Community-Based Learning, Portland, Active Learning, Global Human Resources

1. はじめに

龍谷大学政策学部ではポートランド州立大学（以下、PSU）と連携して2018年度・2019年度に「ポートランド国際 CBL プログラム」を開講した。本プログラムは、アメリカ・ポートランドをフィールドに、龍谷大学政策学部と PSU との協働で開発した教育プログラムを通して、アクティブ・ラーニングを主軸とする実践的な学びを展開し、国際的な視点をもって地域社会の課題解決を目指すグローバル人材を育成することを狙いとしている。一連のプログラムを通じて、国際社会や地域社会の課題解決に対して高い市民意識を持ち、グローバル人材として国内外で活躍する地域社会のリーダーになりたいという明確なビジョンをもった学生を輩出することを目指している。

ところで、CBL とはコミュニティ・ベースド・ラーニング（community-based learning）〈地域連携型教育〉の略称で、PSU が全学をあげて取り組んでいる実践型教育である。龍谷大学政策学部では PSU と共同でポートランドでの実践的教育プログラムを開発し、これを CBL と位置づけ、2018年度から「ポートランド国際 CBL プログラム」を開講するに至った。

本稿では、龍谷大学政策学部と PSU とが協働で開発した「ポートランド国際 CBL プログラム」の2019年度の取り組みの概略について述べるとともに、受講生アンケート等の結果からプログラムの成果と課題について考察することを目的とする。

2. 龍谷大学政策学部とポートランド州立大学との連携の経緯

ポートランドは、全米でもっとも住みやすいまちに選ばれ、環境にやさしいまちとして日本でも人気があるオレゴン州最大の都市で日本からも注目を集めている（山崎、2016）。とりわけ、住民主体のまちづくりやエコシティ、コンパクトシティといったテーマで、毎年多くの自治体やビジネス関係の方々がポートランドへ視察に訪問されている。

ポートランド市内中心部に位置する PSU は、オレゴン州内最多の学生数を有し、社会人学生の獲得や博士課程の充実に注力し、研究大学としての地盤を築いてきた。PSU 全学をあげて取り組んでいるのが CBL である。毎年、280 を超えるさまざまな CBL プログラムが展開されており、学生は地域に出向いて実践的に学んでいる。PSU の有名なスローガンである“Let Knowledge Serve the City”（知識をもってまちに貢献せよ）に表れているように、大学で研究・教授される知識を机上の知識でとどめず、コミュニティの課題解決やまちづくりにも活かしていくことを重要視しているのである。CBL を通して多様なコミュニティとパートナーシップが築かれ、PSU は地域変革のアンカーの役割を担っている。まさに、地域と大学がともに協力し成長するという高等教育のあるべき姿を具現化している先進事例である。

PSU との連携の始まりは、政策学部開設の原動力となり、政策学部の学びを研究面からサポートしている地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）との共同研究にある。持続可能な地域実現のための政策や協働型ガバナンスをテーマに、PSU から共同研究者として研究を進めてきた。2015年に、LORC の研究メンバーが都市間連携の調査のためにポートランドを訪問した際、訪問中に開催された PSU パブリックサービス実践研究所（Center for Public Service）主催の研究ミーティングで、LORC からの報告として、京都における大学地域連携の取り組みである「京都アライアンス」について紹介した。これがきっかけとなって「大学地域連携」や「人材育成」といった新たなテーマでの連携へと展開したのである。

2016年2月には、LORC 研究メンバーが PSU を訪問し、ポートランド州立大学パブリックサービス実践研究所と LORC の共同ワークショップ「大学の社会関与を進める教育・研究」を2日間にわたって開催し、大学・地域連携における大学の役割や地域と連携した教育プログラムの実例を双方から報告し、意見交換や議論を行った（龍谷大学 LORC、2016）。同年12月には、PSU で展開されている先進的

表1 龍谷大学と PSU との連携の経緯

2008年	LORC メンバーとして PSU から参加し、マルチパートナーシップやガバナンスに関する共同研究着手
2015年	LORC メンバーが都市間連携の調査でポートランドを訪問した際、京都の大学間連携プロジェクトについて報告したことをきっかけに、「大学地域連携」や「人材育成」についての共同研究へと進展
2016年2月	PSU パブリックサービス実践研究所・LORC 共同ワークショップ「大学の社会関与を進める教育・研究」（2日間、PSU）
2016年12月	PSU・龍谷大学間一般協定締結 PSU パブリックサービス実践研究所・LORC 間で一般協定締結 国際シンポジウム「ポートランド州立大学のコミュニティ・ベースド・ラーニング」 CBLサポートスタッフのためのワークショップ（3日間、龍谷大学）
2017年4月	PSU 学長講演会「社会関与を進める大学—ポートランド州立大学をどのようにして地域社会にとって不可欠な存在にしたのか」（龍谷大学）
2017年10月	The Coalition of Urban and Metropolitan（都市型大学連合）年次大会においてパネル “Engaging Engagement: Kyoto and Portland Partner to Elevate High Impact Practices”（社会関与をすすめる教育—インパクトを与える教育実践の向上に向けた京都・ポートランドの連携）発表（デンバーで開催）
2018年2月	「ポートランド国際 CBL プログラム」の具体的なカリキュラムや実施形態について PSU にて検討
2019年11月	PSU より CBL 担当教員が訪問、講演会「知識をもってまちに貢献せよ—ポートランド州立大学におけるコミュニティ・ベースド・ラーニング」（龍谷大学）
2021年春	書籍『ポートランド州立大学のコミュニティ・ベースド・ラーニングに学ぶ—大学の新しい役割』出版

な取り組みを国内で発信し、京都における大学間連携による人材育成を PSU の研究メンバーにさらに詳しく紹介することを目的に、龍谷大学において、国際シンポジウム、京都における CBL の現地訪問、CBL のサポートスタッフによるワークショップを開催し、3日間にわたって活発な研究交流を行った（龍谷大学 LORC、2017a）。PSU と龍谷大学、PSU パブリックサービス実践研究所と LORC 間で、同時に2つの一般協定の締結式も執り行われた。その際、PSU 側からお互いの学生の交流や協働の CBL プログラムの実施をぜひ実現したいという強い希望が出されたことが、本稿で紹介する「ポートランド国際 CBL プログラム」の実現へとつながった。

一般協定締結後も研究交流は活発に行われ、2017年4月には、PSU 学長が龍谷大学の表敬訪問と講演会の開催（龍谷大学 LORC、2017b）、両大学による国際学会でのパネル発表（白石・村田、2017）、CBL 担当教員の訪問と講演会の開催（龍谷大学 LORC、2020）と続く。これまでの研究活動は、2021年春に書籍として出版する予定である（白石・西芝・村田、in press）。

PSU との連携ならびに活発な研究交流に

よって生まれたのが「ポートランド国際 CBL プログラム」である。プログラムの設計にあたっては、2019年2月に龍谷大学の教員3名が PSU を訪問し、テーマやカリキュラムについて両大学の教員と検討を行った。その結果、「CBL のエッセンスを学ぶ」をプログラムの全体テーマとし、政治システム、ローカルガバナンス、公共性、市民参加についてフィールドワークやグループワークを通じて学べるカリキュラムを構築することとなった。現地プログラムでは、英語のみを使用するとし、龍谷大学生と PSU の学生が相互に意見交換できる機会を持つこととした。その後の両大学での検討の中で、PSU 側から立命館大学政策科学部も参加に名乗りをあげており、立命館大学生も交えた合同でのプログラムで開講できないかという打診があり、一定の受講者数の確保のためにも、両大学を対象としたプログラムを実施することとなった。

3. ポートランド国際 CBL プログラムの概要

（1）プログラムの到達目標

本プログラムは、アメリカの社会・文化の基礎的な知識を学び、日本とアメリカとの比較の

視点を持って、地域やコミュニティが抱える課題を考察し、英語で政策提言できることを狙いとしている。一連のプログラムでの学びや経験を通して、国際社会や地域社会の課題解決に対して高い市民意識を持ち、グローバル人材として国内外で活躍する地域社会のリーダーになりたいという明確なビジョンをもった学生を輩出することを目指した。これらを踏まえて、本プログラムの到達目標として以下の3点を定めた。

- ① ポートランド州立大学での協働ワークショップやアクティブ・ラーニングを通じて、CBLの実践手法について身につける。
- ② 現地の大学生と協働してアメリカにおけるコミュニティの課題を抽出し、説得力のある政策提言ができるようになる。
- ③ ポートランド州立大学でのプログラムを通じて実践的な英語力を身につける。

(2) プログラムの全体カリキュラム

上記の到達目標を達成するために、現地プログラムだけに留まらず、事前・事後学習の体系的なカリキュラムを構成することで、プログラムの充実を図った。本プログラムの2019年度のカリキュラムの全体像について見ていく(表2)。

事前学習では、アメリカ・ポートランドの都市政策に関する輪読を行い、アメリカの文化やポートランドの都市政策に関する基礎的な知識について学んだ。実践的な英語力を修得するために、英語の勉強法や留学生とのディスカッションの機会を設けた。PSUの西芝雅美氏が日本での滞在中に龍谷大学を訪問してくださり、受講生に対して現地プログラムの概略やポートランドで学ぶ意義について話題提供していただいた(図1)。

現地プログラムでは、9月初旬にポートランドに1週間程度滞在し、PSUが提供している協働ワークショップに参加し、現地の方々と協働してアメリカにおけるコミュニティの課題を抽出し、プログラムで得られた成果について英語でプレゼンテーションしてもらった。現地プログラムはPSUのDr. Peter Chailleにカリキュラムの設計とプログラムのコーディネートを担当していただいた。ポートランドだけでな

く、経由地であるサンフランシスコのダウンタウンを見学し、ポートランドだけではないアメリカの都市の多様性について実感してもらった。

現地プログラムの終了後には、事後学習を開催し、現地プログラムで得られた成果と課題を共有するとともに、報告書の作成と報告会での発表準備に取り組んだ。また、現地プログラムの学びの根幹であるCBLや都市政策について補足的に学ぶべく、PSUのMs. Celine Fitzmauriceが日本に滞在していた時期に龍谷大学にも訪問していただき、CBLについて理解を深めるワークショップを開催(図2)した。担当教員からもCBLに関する講義や、日本とアメリカとを比較しながらコンパクトシティについて学ぶ講義を提供した。最終的には、12月に政策学部教職員らを交えてのFD報告会で受講生自らがプログラムの成果と課題について英語で報告した(図3)。

プログラムの教員として、2018年度は3名の教員(石原凌河准教授、吉本圭佑准教授、服部圭郎教授)が担当し、2019年度は2名の教員(石原凌河准教授、村田和代教授)が担当した。また、プログラムの円滑な運営をサポートしてもらうために、地域協働総合センター(CeLC)の実践型教育プランナーである櫻井あかね助手(2018年度)と榎並ゆかり助手(2019年度)にも協力を得た。

2018年度はプログラムの実施初年度ということで試行的に実施することとし、課外プログラムとして実施することとなったものの、17名の学生(うち、2年生6名、3年生10名、4年生1名)が参加した。2019年度は正課プログラムとして開講することとした。他の海外PBLプログラムと同様に「政策実践・探究演習(海外)」という科目の一プログラムとして展開し、10名の学生(全員2年生)が参加した。

(3) 2019年度現地プログラムの概要

PSUが提供する現地プログラムは5日間実施され、主に午前中は大学内での講義やグループワーク、午後はポートランド市内でのフィールドワークを実施した(表3)。

2019年度の現地プログラムの概略について紹

表 2 2019年度のポートランド国際 CBL プログラムのカリキュラム

日時	学修内容
4月9日（火）3 講時	オリエンテーション、プログラムの紹介
4月23日（火）3 講時	プログラムの概要
4月30日（火）3 講時	ポートランドの都市政策 講師：服部圭郎氏（龍谷大学政策学部教授）
5月7日（火）3 講時	英語の勉強法 講師：村田和代氏（龍谷大学政策学部教授）
6月11日（火）3 講時	米国の都市政策に関する書籍の輪読（1）
6月25日（火）3 講時	留学生とのディスカッション
7月2日（火）3 講時	ポートランド州立大学の先生による特別講義 講師：西芝雅美氏（ポートランド州立大学行政学部長、教授、パブリック・サービス研究・実践センター副所長）
7月23日（火）3 講時	米国の都市政策に関する書籍の輪読（2）
9月1日（日）～9月9日（月）	ポートランド州立大学での現地プログラム サンフランシスコでのフィールド・トリップ
9月24日（火）3 講時	Community Based Learning（CBL）について 講師：村田和代氏（龍谷大学政策学部教授）
10月8日（火）3 講時	ポートランドはコンパクトシティか？ —日本とアメリカとのコンパクトシティの観点からの比較— 講師：石原凌河氏（龍谷大学政策学部准教授）
10月22日（火）3 講時	発表準備・資料作成（1）
11月5日（火）3 講時	発表準備・資料作成（2）
11月26日（火）3 講時	Let Knowledge Serve the City 講師：Celine Fitzmaurice（PSU Senior-Instructor II）
12月10日（火）3 講時	成果報告会発表リハーサル
12月11日（水）5 講時	成果報告会（FD 報告会）



図 1 西芝雅美氏による特別講義（2019年7月2日実施）

介する。プログラム初日は、午前中にプログラムのオリエンテーションを実施し、参加者の自己紹介をした後に、PSU のスタッフからポートランドで生活する上での基礎的な情報に関するレクチャーを受けた。午後はポートランド・ダウンタウンのまちあるきを行い、University

District、Pearl District、Northwest Districtなどを訪問し、まちあるきを通じてポートランドの発展の歴史とまちの現状について学んだ（図4）。

2日目は、午前中に「Community とは何か?」、「Citizen とは何か?」というテーマで



図2 Ms. Celine Fitzmaurice による CBL に関するワークショップ (2019年11月26日実施)



図3 FD 報告会での発表の様子 (2019年12月11日実施)

表3 現地プログラムのカリキュラム

Day 1	Orientation & overview (in class) Exploration of themes -Portland as laboratory (onsite)
Day 2	Reflections + Foundations of Community-Based Learning (in class) Learning Gardens Laboratory - activity 1 (onsite)
Day 3	Reflection of the previous day and lecture (in class) Learning Gardens Laboratory -activity 2 (on class)
Day 4	Reflection of the previous day and lecture (in class) Learning Gardens Laboratory -activity 3 (on site)
Day 5	Reflection (in class), Prep for presentations Final Presentations

グループでの話し合いを行い、話し合いの結果を英語で発表し合った (図5)。午後からは、ポートランド・ダウンタウン近郊の Washington Park を訪問し、山道を歩きながら、都市

と自然との共生や自然や生態系も含めたコミュニティの役割について理解を深めた。

3日目は、午前中に PSU の西芝教授から、効果的なコミュニケーションについて話題提供してくださった。ペアで大きな声での質問と返答のやりとりしながら、コミュニケーションにおけるジェスチャー、表情、声量の大切さについて学んでいった。午後からは、ポートランド州立大学が所有する Learning Gardens Laboratory を訪問し、Learning Gardens Laboratory の役割についてレクチャーを受け、実際に農作業を行った。農作業を体験しながら、日本とアメリカでの農業の違い、Learning Gardens Laboratory における市民と大学との協働の仕組みなどについて学んでいった (図6)。

4日目は、3日目に引き続いて、Learning Gardens Laboratory を訪問した。まずは、一人ずつガーデン内の様々な場所に別れて、座ったり、寝転がったりするなど思い思いに過ごし、自然を感じとっていった。その後は、グループ



図4 ポートランド・ダウンタウンのまちあるき様子 (2019年9月2日実施)



図5 グループワークの様子 (2019年9月3日実施)



図6 Learning Gardens Laboratory での農作業体験の様子 (2019年9月4日実施)



図7 最終プレゼンテーションと修了式の様子 (2019年9月6日実施)

表4 学生が作成したプログラムの学びに関する記事の内容（原文のママ）

[2018年度受講学生] ポートランド州立大学での授業は今日で最後でした。この5日間のプログラムを通して得た学び、発見を元に各チームでプレゼンテーションを行いました。私の班はこれまで経験してきたことを劇で再現し、何を行っている場面か、またそれを通して何を感じたかについて述べました。また、他の班では、司会が進行を進め、メンバーに質問をしそれに答える、といったニュース形式でプレゼンテーションを行ったりなどと、とてもクリエイティブさ発揮していました。 授業の最後にはなんとびっくりアメリカ流の卒業式を経験させてくれました。実際に賞状を貰い、ローブと帽子を被り最後にはみんなで帽子を一斉に放り投げました。まさか、このような経験を出来ると思っていなかったのが高揚感が止まりませんでした。この5日間を通して様々な人にお世話になりました。この CBL は私にとって有意義な時間だったと強く思います。
[2018年度受講学生] 私たちは、今日、ポートランド州立大学でのプログラムを修了しました。5日間という短い期間ではありましたが、その限られた時間で得られた知識や学んだことをプレゼン形式で発表しました。みんなの発表を聞いていると、今日までにしたさまざまな事や、色々な人とコミュニケーションを取ったなど、思い出しました。今日の質問のテーマに、ポートランドで学んだことの中で何を持ち帰りたいか、という質問がありました。私はそれに対して、自信を持って答えるという精神を持ち帰りたいと一番思いました。私を含め、日本人は分からないことがあると黙ったり、逆にわかっていても声に出さないことがよくあります。しかし、このポートランドの授業、つまりピーターから、間違っているかは問題ではなくて、答えることが重要なんだと、分かりました。 最後に、大学の先生方から卒業証書などを貰って、プチ卒業式をして頂きました。まさかそんなものがあると思わなかったのが、嬉しかったのと同時に、このプログラムが終わることが悲しかったです。5日間の楽しい思い出をありがとうございました。ピーター教授を含めた先生たちが大好きです。
[2019年度受講学生] 今日はポートランド州立大学でのプログラムの最終日でした。朝から班ごとで準備に取り掛かり、午後に5日間の学びから得たものをプレゼンテーションしました。さまざまな内容の発表を聞くことで、自分が気づけていなかったことを知ることができました。また、多くの先生方からプレゼンテーションに対して意見を頂き、自分自身の理解を深める機会となりました。その後に行った卒業式ではポートランドとの別れを実感し、プログラム終了の達成感と同時に少し寂しさを感じました。5日間、実際にポートランドという都市に触れて学ぶことで、本や資料では知ることのできなかったポートランドの魅力を知ることができ、とても良い経験になりました。ポートランドでの学びは終わりですが、この5日間に得た知識や情報を次の学びへと繋げていきたいです。
[2019年度受講学生] 最終日は午後から最終のプレゼンテーションがあったので、午前中はグループごとにプレゼンの準備をしました。具体的な内容は5日間で様々なポートランドの特徴などを見て学んだことから、spaces → connection → story → leap と、順番にまとめていくというものでした。作業を進めていくと、グループ内でも考え方や捉え方、進め方など異なる点が様々ありました。そして、今までのディスカッションでは1つのテーマが決まっていた、それについてみんなで考えてまとめていたが、今回はテーマというものがありませんでした。ピーター先生から正しい答えはないと教わりながらも、グループで自分たちの考えや意見をまとめて自分たちの答えを出す難しさも改めて学びました。プレゼンでは英語で話すため相手にしっかりわかってもらえるのか不安もありましたが、どのグループも表現の仕方に工夫をし、自分たちの学びを一生懸命伝えることができたと思います。 このプログラムに参加して、事前授業で学んだポートランドの特徴を実際に目で見て、日本とポートランドの違いを考えることができたことが私にとって大きな学びでした。また、プレゼンするための準備段階には何を考えないといけないのか、どう相手に伝えれば良いか、など普段の大学でやっていることも英語になると難しく感じましたが、やりがいがあり、このプログラムに参加できてよかったと思っています。この学びをこの10日間で終わらせるのではなく、日本に帰って活かせるようにしたいです。

に分かれて、昨日に引き続き野菜の収穫や畑の整備などの農作業を行い、日本とアメリカでの農業の違い、Learning Gardens Laboratory における市民と大学との協働の仕組みなどについて引き続き学んだ。Learning Gardens Laboratory での活動終了後は、収穫した野菜を近隣のコミュニティセンターまで届けた。コミュニ

ティセンターでは、NPO のスタッフの方から説明を受けた。説明を通して、収穫した野菜が低所得者の方々に届けられ、Learning Gardens Laboratory の活動が福祉やコミュニティの支援に役立っていることを学んだ。

最終日である5日目は、午前中には、まず、2日目のまちあるきで撮った写真を見ながら、

ポートランドのまちの魅力についてディスカッションを行った。その後、グループに分かれて最終プレゼンテーションの準備を行った。午後には最終プレゼンテーションを行い、CBL プログラムの経験に基づいて、“Citizenship”、“Livability”、“Community”、“Perspective”の観点からポートランドの特徴や魅力について英語で発表した。最後には受講生全員がガウンを着用し修了式を執り行った（図7）。

現地プログラムの様子について学生に交代制で記事を作成してもらい、その内容を龍谷大学政策学部ホームページから広報してもらい、プログラムの学びを対外的に発信していった（表4）。

4. 受講学生による事前・事後アンケート調査結果

（1）アンケート調査の概要

2018年度及び2019年度受講生のポートランド国際 CBL プログラムに対する期待及び不安の度合いを定量的に把握するために、現地プログラム開始前と開始後にそれぞれアンケートを課した。事前アンケートでは、これまでの渡航経験に関する内容を尋ねるとともに、プログラムに期待していること及びプログラムに参加する上で不安だと思うことについて選択肢により尋ねた。事後アンケートでは、プログラムに参加しての期待の達成度合い及び不安の解消度合いについて選択肢で尋ねるとともに、プログラムに参加して得られた学びと、ポートランドに行く前に知っておきたかったことや学んでおきたことについて自由記述により尋ねた。選択肢はリッカート尺度4件法を採用した。なお、両年度とも回答数が少ないことから統計分析は行っていない。

（2）海外への渡航経験

受講学生から海外への渡航経験の有無と渡航回数について尋ねた（表5）。その結果、両年度ともにほとんどの学生は海外渡航経験を有しているものの、海外渡航経験がない学生も本プログラムに参加したことが確認できた。海外渡航回数は、2018年度は平均2.82回、2019年度は

表5 海外渡航経験に関する回答結果

	2018年度	2019年度
海外渡航経験	あり：14名 なし：3名	あり：9名 なし：1名
海外渡航回数	平均：2.82回 最大：12回	平均：2.00回 最大：6回

平均2.00回ということから、海外渡航経験を有している学生の大半は渡航経験が1～2回程度であり、海外渡航経験を多く有し、海外に慣れている学生はごく僅かであった。

（3）プログラムへの期待に関する項目

事前アンケートで尋ねた「プログラムに期待していること」及び事後アンケートで尋ねた「期待がどれだけ達成されたか」に関する各設問の年度毎の平均値を表6に示している。平均値が高い項目のうち上位3項目に二重線を、平均値が低い項目のうち下位3項目に一重線を表6中の値に下線している。2019年度の事前アンケートはどの項目も相対的に平均値が高い値を示したことから、下位3項目には下線を記していない。平均値が高いほど期待している度合い及び期待が達成された度合いが高いことを表している。

まずは事前アンケートの結果について見ていく。2018年度の事前アンケートでは、「現地の街並みを観察する」が最も平均値が高く、「CBLによる実践的な学びの機会を得る」、「現地の都市政策について理解する」が次いで高い値を示した。2019年度の事前アンケートでは、「現地の街並みを観察する」、「現地の人々の生活を観察する」、「CBLによる実践的な学びの機会を得る」が同値で最も平均値が高い値を示した。両年度の受講生ともに「CBLによる実践的な学びの機会を得る」について期待値が高いのは、語学力の向上を目指す留学とは異なり、本プログラムの目標であるアメリカのコミュニティの理解やCBLの実践手法を修得することに対して受講生が期待しているからだと考えられる。両年度ともに「現地の街並みを観察する」が高い値を示したのは、受講生の大半が海外の渡航経験が浅いことから、海外での生活を通じて異国の街並みや異文化を理解することに

表6 プログラムへの期待（事前）／期待の達成度合い（事後）に関する設問と平均値

設 問	2018年度 (n=17)		2019年度 (n=10)	
	事前	事後	事前	事後
1 英語力が向上する	3.00	2.75	3.60	1.90
2 これまで自分が学んできた英語力を試す	2.94	3.00	3.00	3.00
3 積極的に英語でコミュニケーションできるようになる	3.24	3.00	3.70	2.80
4 新しい友人、人間関係ができる	3.00	3.25	3.40	3.20
5 現地の大学生と英語で交流する	3.12	1.69	3.60	2.00
6 チャレンジ精神が高まる	3.12	2.88	3.70	3.10
7 日本文化について英語で紹介できるようになる	2.76	2.00	3.20	1.80
8 客観的な視点から日本を見つめ直すきっかけになる	3.12	3.06	3.70	3.60
9 現地の街並みを観察する	3.71	3.69	3.80	4.00
10 現地の人々の生活を観察する	3.29	3.19	3.80	3.40
11 現地の食文化を体験する	3.35	3.69	3.60	3.80
12 現地の都市政策について理解する	3.47	3.25	3.60	3.40
13 市民参加のアプローチや手法について理解する	3.41	2.88	3.40	2.90
14 コミュニティの役割について理解する	3.29	3.19	3.30	3.40
15 現地の歴史・文化について理解する	3.41	3.06	3.50	3.10
16 CBL による実践的な学びの機会を得る	3.53	3.13	3.80	3.50
17 グローバルな視点から人類的及び地域的課題について理解する	3.35	2.88	3.50	2.80
18 政策学に関する専門知識を身につける	3.35	2.69	3.30	2.80

期待しているためだと考えられる。

一方で、平均値が最も低い値を示したのは、2018年度の事前アンケートの結果のみだが、「日本文化について英語で紹介できるようになる」で、「これまで自分が学んできた英語力を試す」が次に低い値を示し、「英語力が向上する」と「新しい友人、人間関係ができる」が続いて同値で低い値を示した。英語での紹介や英語力の向上に関する項目が低いのは、語学留学とは異なり、英語を通じて CBL やコミュニティについて学ぶことを意図したプログラムであることを受講生が認識しているからだと考えられる。

次に事後アンケートの結果について見ていく。2018年度の事後アンケートでは、「現地の街並みを観察する」と「現地の食文化を体験する」が最も平均値が高い値を示し、「新しい友人、人間関係ができる」と「現地の都市政策について理解する」が続いて同値で高い結果となった。2019年度の事後アンケートでは、「現地の街並みを観察する」が最も高く、「現地の食文化を

体験する」、「客観的な視点から日本を見つめ直すきっかけになる」と続いた。両年度とも現地の街並みを観察する、現地の食文化を体験するが相対的に高い値を示したのは、渡航経験が浅い受講生も多く参加していたことから、一般的な海外旅行とは異なり、大学が提供するプログラムの一環で、海外で一定期間の生活を体験できたことで異国の文化に触れたことを新鮮に感じたからだと考えられる。

一方で、平均値が最も低い値を示したのは、2018年度の事後アンケートでは、「現地の大学生と英語で交流する」であり、「政策学に関する専門知識を身につける」、「英語力が向上する」が次いで低い値を示した。2019年度の事後アンケートでは、「日本文化について英語で紹介できるようになる」が最も低く、「英語力が向上する」、「現地の大学生と英語で交流する」が次いで低い値を示した。両年度とも「英語力が向上する」が相対的に低い値を示したのは、現地で滞留期間が短く、短期間では英語力が飛躍的に向上できないことを体得した学生が多

表7 プログラムに参加する上での不安（事前）／不安の解消度合い（事後）に関する設問と平均値

設 問		2018年度 (n=17)		2019年度 (n=10)	
		事前	事後	事前	事後
1	自分の英語が通じるかどうか	1.71	1.71	1.71	<u>2.60</u>
2	現地の人々の英語が聞き取れるかどうか	<u>1.59</u>	<u>1.59</u>	<u>1.59</u>	2.70
3	新しい友人や人間関係ができるかどうか	2.53	2.53	2.53	3.10
4	現地の習慣に馴染めるかどうか	2.76	2.76	2.76	3.30
5	現地の治安が良好かどうか	<u>2.82</u>	<u>2.82</u>	<u>2.82</u>	<u>3.40</u>
6	現地での生活費（交通費や食費など）がどれだけかかるか	2.24	<u>2.82</u>	2.24	3.10
7	現地プログラムが理解できるかどうか	2.12	2.24	2.12	3.10

かったからだと推察される。そのため、現地プログラム終了後も、実践的な英語を継続的に学ぶための方法や場を提供することが求められるだろう。「現地の大学生と英語で交流する」が両年度とも低い値を示したのは、到達目標に「現地の大学生と協働してアメリカにおけるコミュニティの課題を抽出すること」と掲げているものの、PSU が夏休み期間ということもあり現地の学生と交流する機会を提供できなかったからだと考えられる。2019年度のプログラム終了後の両大学の教員間での打ち合わせの中で、PSU の教員から、ランチをとりながら受講生がアメリカの留学生や地域住民に対して日本の文化を紹介するなど、受講生と PSU の留学生や地域住民とが交流できる機会を設けたいという提案もいただいているが、現地の学生との協働を到達目標に掲げている以上、受講生と PSU の学生との相互交流の機会を提供することが望まれる。

（４）プログラムの不安に関する項目

事前アンケートで尋ねた「プログラムに参加する上で不安に思っていること」及び事後アンケートで尋ねた「不安がどの程度解消されたか」についての各設問の年度毎の平均値を表7に示している。平均値が高い項目のうち上位1項目に二重線を、平均値が低い項目のうち下位1項目に一重線を表7中の値に下線している。平均値が高いほど不安ではない度合い及び不安が解消された度合いが高いことを表している。

まずは事前アンケートの結果について見ていく。両年度の事前アンケートともに「現地の治

安が良好かどうか」が最も高い平均値を示した。一方で、最も低い平均値を示したのは、両年度とも「現地の人々の英語が聞き取れるかどうか」であった。受講生の多くは海外経験が乏しく、高い英語コミュニケーション能力を有していないため、多くの受講生が英語でのコミュニケーションに不安を感じている学生が多かったためだと思われる。

次に事後アンケートの結果について見ていく。両年度の事後アンケートともに「現地の治安が良好かどうか」が最も高い平均値を示した。事前アンケートの結果から、プログラムに参加する前から治安に対して不安を感じている学生は相対的に少なかったものの、現地では自由行動の機会を提供したことからも、大半の学生が治安に対する不安を払拭できたものだと考えられる。ただし、アメリカ全土の治安が良好であるということではなく、ポートランドは例外的に治安が良いということを受講生に認識してもらう必要があるだろう。

一方で、最も低い平均値を示したのは、2018年度の事後アンケートでは「現地の人々の英語が聞き取れるかどうか」で、2019年度の事後アンケートでは「自分の英語が通じるかどうか」であり、いずれも英語でのコミュニケーションに関する設問であった。前述した通り、短期間で英語力が向上し、自分自身の英語が通じて、現地の人々の英語が聞き取れるまでに至るのは容易ではないことを現地での経験を通じて受講生が実感したからだと思われる。

表 8 ポートランド国際 CBL プログラムに参加して得られた学びに関する自由記述（原文のママ）

① アメリカと日本との差異と比較の視点 [2018年度] - 日本とは全く違う部分や制度、取り組みに驚いたこともあったりカルチャーショックを受けたこともあった。 - アメリカの大学生と日本の大学生の意識の違いについて知ることができた。 - 文化の違い。 - 日本とポートランドのコミュニティへの関心の違い。 - ポートランドの良さを知り、日本と比較することで、日本の良さを知った。 - 日本との違いを感じたり、ポートランドの良さ、逆にあまり良くないところもわかった。 [2019年度] - 日本とアメリカの違いがよく分かった。 - 異なる文化にどう適応するかの対応力。
② コミュニティや都市政策に関する理解 [2018年度] - コミュニティとは何かについてグループワーク、ラーニングガーデンを通じて学ぶことができた。 - 現地の都市計画や景観についての知識。 - コミュニティ（コミュニケーション）を実感しながら学べた。 - サンフランシスコの都市再開発事業について学ぶことができた。 [2019年度] - コミュニティは人だけでなく自然との共存で成り立つこと。
③ 現地での発見・体験 [2018年度] - 現地に訪れないとわからないようなことがたくさんあり、体感することができた。 11日間アメリカにいて、アメリカについて良くわかった。 [2019年度] - 実際に自分の足で歩いてみることによって、本では学べなかったことに気づくことができた。 - 自分の目でみるのが大切だと学んだ。日本にいたら気づくことができない発見をすることができた。 - 実際に今まで見たことも体験したこともないような街に行き、隅々まで観察して考えることで、日本との違いを感じたり、ポートランドの良さ、逆にあまり良くないところもわかった。
④ 英語の重要性や理解 [2018年度] - 海外で実践的に英語を学ぶ大切さ。ピーター先生には私が初めは声が小さかったけど、最後の発表では大きな声ではきはきと話せていたと言ってもらえた。 [2019年度] - 英語力がないことに気づかされて、もっと勉強しようと思った。 - 地域の人々と話す機会が多く、英語はとても親しみのある言語だなと思った。ポジティブ思考にも驚いた。
⑤ 積極性の大切さ [2018年度] - アメリカの大学の授業の積極性の大切さ。 - 自信がなくても積極的に英語で話すことの大切さを学びました。 - 間違いは恥ずかしいものでなく、成長のために最も必要だということ。
⑥ コミュニケーションの重要性 [2018年度] - 自分の思っていたことを伝えるのは難しいと感じたけど、それだけではないと思えた。 [2019年度] - 政策学部で普段から議論していることの深掘りでき、考え方の幅が広がった。
⑦ その他 [2018年度] - 英語に関しても、政策の知識に関しても自信がなく、このプログラムがどれだけ自分のためになるかととても不安だったが、いざ行ってみると楽しく活動できた。 [2019年度] 「自分で」調査・発見する主体性や自立性。

（５）プログラムに参加して得られた学び
に関する自由記述
プログラムに参加して得られた学びに関する

自由記述の内容について年度毎に整理した（表
8）。この内容を分類すると、「アメリカと日本
との差異や比較の視点」、「コミュニティや都市

政策に関する理解」、「現地での発見・体験」、「英語の重要性や理解」、「積極性の大切さ」、「コミュニケーションの重要性」、「その他」の7つに区分された。両年度とも「アメリカや日本との差異や比較の視点」、「コミュニティや都市政策に関する理解」、「現地の発見・体験」に関する項目について多くの記述がなされた。現地プログラムだけでなく事前・事後学習を通して、日本とアメリカとを比較しながら、コミュニティや市民について熟考する機会を提供してきたが、受講生自身がその差異について身をもって実感できたと考えられる。2018年度は「積極性の大切さ」について多くの意見が挙がったのは、当初は自信を持って主体的に英語で発信できる受講生が少なく、積極的にコミュニケーションを図る重要性を現地の教員からも繰り返し指摘され、受講生がその重要性を体得したからであろう。

(6) ポートランド国際 CBL プログラムに参加する前に知りたかったこと、学んでおきたかったことに関する自由記述

ポートランド国際 CBL プログラムに参加する前に知りたかったこと、学んでおきたかったことに関する自由記述を年度毎に整理した(表9)。この内容を分類すると、「ポートランドへの理解」、「英語の勉強の習得」、「現地プログラムの理解」、「滞在に必要な事項に関する理解」、「その他」の5つに区分された。

両年度とも「ポートランドへの理解」に関して多くの意見が挙がった。現地での滞在経験なしにポートランドの文化や都市政策について理解を深めることは容易ではないものの、受講生からの意見にも挙がっているように、航空写真や Google ストリートビューなどを利用して、現地に滞在しなくてもポートランドについて理解を促すための事前学習のカリキュラムについて検討する余地があるだろう。2018年度は「滞先に必要な事項に関する理解」について、特に生活費も含めた現地で必要なコストや支払い方法に関する内容、滞在先でのアメニティに関する内容が多く挙がった。2019年度にはこれらの

内容を事前に受講生に周知できたので、2019年度はこうした意見は皆無であった。2019年度は「現地プログラムの理解」に関する意見が多く挙がっていた。その理由として、PSU 側との連携が直前にうまく図れず、現地への訪問前にプログラムの詳細を受講生に周知できなかったことに起因すると思われる。そのため、受講生の事前準備での不安を考えると、現地プログラムの詳細を事前に周知することが望まれる。

5. プログラムの成果と課題

(1) プログラム全体の成果

ここまでポートランド国際 CBL プログラムの概要と受講生によるアンケート調査の結果について見てきたが、これらを踏まえて、本プログラムの成果と課題及び2018年度プログラム固有の課題について整理する。まず、プログラム全体の成果として3点指摘しておきたい。

第一に、日本とポートランドとの比較を通じてCBLについて実践的に学べた点である。本プログラムにより、日本とポートランドとを比較しながら、コミュニティや CBL について理解を深め、英語でプレゼンテーションすることを経験できた。こうした海外での経験を通じて、グローバル人材として国内外で活躍するために必要となる素養を身につけることができたと考えられる。受講生による事前アンケートの結果からも、CBL による実践的な学びの機会を得ることに対する受講生の期待は高く、本プログラムは海外での経験を通じて CBL を実践的に学べるプログラムとして龍谷大学政策学部のカリキュラムに位置づけられるだろう。なお、現地プログラムのコーディネートを担ってもらっている Dr. Peter の専門は生態学であり、現地プログラムは農業や環境をテーマとしたカリキュラムで構成されていることから、現地プログラムの内容を勘案すると、農業や環境を専門とする教員がプログラムの教員を担うことが望ましいと考える。

第二に、本プログラムにより受講生が積極的に英語で発信する姿勢を身につけた点である。本プログラムでは英語で話す機会を頻繁に提供

表9 ポートランド国際 CBL プログラムに参加する前に知りたかったこと、学んでおきたかったことに関する自由記述（原文のママ）

① ポートランドへの理解 [2018年度] ・ポートランドでのチップ制度などを事前におきたかったです。 ・ポートランドに何があるかもっと調べておくべきだった。 ・事前学習では基本的に本を利用したが、現地へ行くと、その内容に疑問を抱くことがあったので、グーグルマップの航空写真を利用して現地のまちなみを見るの良かったかなと思う。 ・もっとポートランドの都市についてや文化において、輪読以外でも学びたかったかもしれません。 [2019年度] ・ポートランドの人々がどのように街を考えているのか。
② 英語の勉強の習得 [2018年度] ・もっとリスニングしてから行くべきだった。 ・よく使う英語やポートランドの明るい部分の他に暗い部分をもっと知っておきたかった。もっと現地の学生とも関わっていたかった。 ・もう少し、英単語や文法を勉強してから行けば良かったと思いました。 ・英語で会話はもちろん、事後学習でも英語で発表があるので、もっと英語を学んでおけば良かったと思う。 ・語学や現地でのマナー。 [2019年度] ・英語力の向上学習。 ・自分自身もっと英語を勉強しておけばよかった。
③ 現地プログラムの理解 [2018年度] ・コミュニティガーデンについてくわしく学んでおきたかった。 [2019年度] ・ポートランドに行って具体的に何をやるのかもっと教えて欲しかった。向こうに行ってから知られることが多かった。 ・現地のスケジュールの公表が遅いと思いました。 ・現地でのプログラムの内容。 ・現地プログラムの具体的な内容や行程の具体的な中身。 ・PSU での細かいスケジュールは9/2 発表でしたが、事前準備も必要なので、出国前には知っておきたかった。 ・ポートランドに行く意味をもっと学んでから行きたかった。もっとここに行っておけばよかったなと日本に帰ってからでは遅いし、ポートランドに行ってから言われても英語を完璧に理解できないので。 ・ポートランドでの詳しい日程表を配られていなかったから、前もって知っておきたかった。
④ 滞在に必要な事項に関する理解 [2018年度] ・お金がどの位かかるのかを、もう少し教えてほしかった。（例えば、電車が結構高かったの、どれくらい必要か、現金にいくらかか替えておくべきかなど） ・交通費／食費がどれくらいかかるか。 ・クレジットカード JCB は使えないということ。100ドル札を現地で使えないということ。 ・旅行会社のしおりの持ち物にはタオルやドライヤーとか書いてあったけど、ホテルにあって持っていたのに…となった。（しおりとホテルホームページ情報の違い） ・アメニティがどれだけ充実しているかが、出発前からわかっていたら無駄な持ち物を減らせたと思う。
⑤ その他 [2018年度] ・事前学習が現地での学習とどうリンクしていたのかよくわからなかった。

してきたものの、受講生自身の英語力の問題以上に、英語でコミュニケーションを取ろうとする自信のなさが顕著に表れており、うまくコミュニケーションを図れない場面が散見された。しかしながら、現地プログラム最終日には大半の学生が自信を持って英語でプレゼンテーショ

ンしていたことから、短期間で英語力が飛躍的に向上することは期待できないものの、大半の受講生が積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとしていたことは特筆すべき点である。このことが好転してか、本プログラムに参加した学生の海外留学の後押しとなり、実際に、複

数名の受講生がプログラム終了後に交換留学や龍谷大学が実施している中期留学プログラムに参加した。本プログラムを契機として実践的な英語力を身につけるためにも、現地プログラム終了後に英語力を向上するための方策や場を提供することや、留学を考えている学生に情報提供の機会を設けることが必要となるだろう。

第三に、立命館大学の学生も加わった合同プログラムについてである。当初は、立命館大学の学生が加わることで、両大学間で壁ができるのではないかという不安があったが、結果的には両年度とも大学間での隔たりは皆無であり、両大学の受講生同士が授業後に買い物や夕食に行くなど相互交流が図られており、学生自身も大学の垣根を超えてのチームメートができたことに喜びを感じる学生も多かった。2019年度のプログラムでは、立命館大学は日本人学生だけでなく留学生5名も参加し、留学生も交えて両大学生との相互交流が図れたことで、学生同士でも英語でコミュニケーションを取ろうとする機会が大幅に増加した。

(2) プログラム全体の課題

次に、プログラム全体の課題として2点指摘しておきたい。第一に、PSU との学生との相互交流の機会が提供できなかった点である。前述した通り、現地学生との相互交流は到達目標に定めていながらも、プログラムの実施期間とPSU の夏休み期間とが重なったこともあり、受講生と PSU との学生との相互交流の機会が提供できなかった。PSU の大学生との交流が実現できないとしても、留学生や現地住民との相互交流の機会を創出することが求められるだろう。

第二に、PSU との連携についてである。2019年度は現地プログラムの詳細を受講生に周知できなかったことで、事前準備に対して不安を感じていた受講生が多かった。例えば、Learning Gardens Laboratory における長時間の暑い中での収穫作業は、帽子などを準備できておらず作業に支障をきたした。天候には問題はなかったものの、雨天時には作業に支障をきたすことが考えられた。そのため、帽子やレ

インコートを事前に持参することを知らせるなど、現地プログラムのカリキュラムや持参物などの詳細を事前に把握・周知することが求められる。これは単に現地プログラムを受け入れてもらう PSU 側の課題ということではなく、協働してプログラムを立案する立場にありながら PSU に任せている龍谷大学や立命館大学にも課題があると考えられる。現地プログラムのカリキュラムやコーディネーションを PSU に全てを委託するのではなく、龍谷大学や立命館大学と PSU とが協働して現地プログラムについて企画段階から検討していくことが求められる。

(3) 2018年度プログラム固有の課題

2018年度は単位化されていない試行プログラムであったが故に、様々な課題も見受けられた。最後にそれらの課題について3点指摘しておく。

第一に、学生のモチベーションについてである。2018年度は試行プログラムで単位化していないということもあり、受講生の学びの動機づけが弱かったことが否めなかった。特に現地プログラム終了後の事後学習や FD 報告会での発表準備に際して学生のモチベーションをいかに維持するかが課題であった。なお、2019年度は単位化され正課プログラムとして位置づけられたため、この課題は解消されている。

第二に、受講生の受け入れ人数に関する点である。2018年度は17名の学生が本プログラムを受講したが、公共交通機関での移動、空港の出入国手続き、ホテルのチェックイン・チェックアウトのやり取り等の時間や手間を勘案すると、本学の学生17名を教員2名が引率するのは大きな負担となった。今後も立命館大学との合同開講ということであれば、本学の定員を最大15名と設定することが望ましいと考えられる。なお、2019年度は定員を15名と設定し、実際の受講生は10名だったことから大きな課題は生じていない。しかしながら、現地でのトラブルへの対応を勘案すると教員2名体制を維持することが望ましいと思われる。

第三にアクシデントへの対応に関する点である。2018年9月に発生した台風21号による暴風の影響で、関西国際空港と本土とを結ぶ連絡橋

の橋桁にタンカーが追突し、長期間に渡って関西国際空港が使用不可能になったというアクシデントが発生した。2018年度のプログラムではこの影響を受け、往路は成田国際空港からの出国、帰路は飛行機が満席になったことからサンフランシスコで追加での1泊を要し、往路と同様に成田国際空港での帰国となった。こうした不慮のアクシデントに対して、学部や事務方が適切かつ迅速に意思決定や対応が図れたとはいい難かった。今後の海外プログラム等でのアクシデントに対して機敏に対応できるためにも、学部や大学全体の危機管理の体制について検討する必要があるだろう。

6. 終わりに

本稿では、龍谷大学政策学部と PSU とが協働で開発した「ポートランド国際 CBL プログラム」の2019年度の取り組みの概略について報告するとともに、受講生によるアンケートの結果等からプログラムの成果と課題について考察した。

日本とポートランドとの比較を通じて CBL について実践的に学べた点と、受講生が積極的に英語で発信する姿勢を身につけることができた点が本プログラムの大きな成果であった。一方で、PSU との学生との相互交流の機会を提供できなかったことや、PSU との連携がうまく図れなかったといった課題も散見されたため、プログラムの精緻化が求められる。

ところで、本プログラムの目標像として、「グローバル人材として国内外で活躍する地域社会のリーダーになりたいという明確なビジョンを持った学生の輩出」と掲げているため、この目標の達成状況を確認するためにも、本プログラムの経験が大学卒業後のキャリアに与えた影響や、受講生が卒業後の地域社会のリーダーとして活躍しているかについて継続的に調査を進めていく必要があるだろう。

本プログラムは2020年度も実施することで準備を進めていたものの、新型コロナウイルス感

染症の世界的な拡大の影響により、本プログラムを中止せざるを得なかった。コロナ禍の状況により今後の海外プログラムの展開が不透明であるものの、今後も「ポートランド国際 CBL プログラム」がより充実したプログラムに発展していくことが切に望まれる。

謝 辞

ポートランド国際 CBL プログラムを実施するにあたり、ポートランド州立大学の西芝雅美教授や Dr. Peter Chaille をはじめ PSU のスタッフの皆様にも多大な協力をいただいた。立命館大学政策科学部の鐘ヶ江秀彦教授をはじめ立命館大学の教員や受講生の皆様にも協力をいただいた。ポートランド国際 CBL プログラムの受講生の方々がいなければ、このプログラムは成立しなかった。なお、ポートランド国際 CBL プログラムの実施にあたっては、龍谷大学親和会、龍谷大学政策学部同窓会、日本学生支援機構、龍谷 IP 事業から助成を受けることができた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 白石克孝・西芝雅美・村田和代（編）（in press）『ポートランド州立大学のコミュニティ・ベースド・ラーニングに学ぶ——大学の新しい役割』ひつじ書房
- 白石克孝、村田和代（2018）「国際会議 CUMU 年次大会における LORC・ポートランド州立大学共同パネルセッション」『LORC ジャーナル地域協働』Vol. 12, pp. 3-4.
- 山崎満広（2016）『ポートランド：世界で一番住みたい街をつくる』学芸出版社.
- 龍谷大学 LORC（2016）「ポートランド州立大学・龍谷大学共同ワークショップ『大学の社会関与を進める教育・研究』」『LORC ジャーナル地域協働』Vol. 9, pp. 12-17.
- 龍谷大学 LORC（2017a）「ポートランド州立大学共催国際シンポジウム」『LORC ジャーナル地域協働』Vol.10, pp. 5-15.
- 龍谷大学 LORC（2017b）「ポートランド州立大学学長 ヴィム・ヴィヴェル氏講演会」『LORC ジャーナル地域協働』Vol.11, pp. 21.
- 龍谷大学 LORC（2020）「知識をもってまちに貢献せよ——ポートランド州立大学におけるコミュニティ・ベースド・ラーニング」『LORC ジャーナル地域協働』Vol. 15, pp.21.